

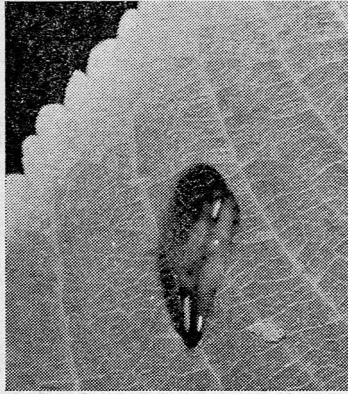
成 虫 (拡大)

# 櫻桃の害虫

## ウチイケオウトウハバチ

桜 井 清

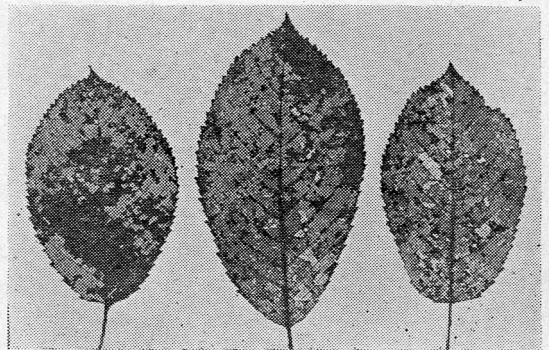
六月終り頃、櫻桃や梨の葉にナメクジの  
ような虫がついて、たちまちのうちに葉を  
網の目のように食い荒し、せつかくの葉の  
りが台無しになつてしまつたという経験を  
お持ちの方が少くないことと思います。こ  
の虫がウチイケオウトウハバチ(内池櫻桃  
葉蜂)の幼虫で、古くから福島県や山形県  
等に発生し、櫻桃の大害虫として知られて  
いました。昭和十三、四年頃から、北海  
道にも急激に繁殖してはなはだしい被害が  
見られるようになりました。その発生は最  
初は札幌附近に限られていましたが、年々  
分布が拡がり、被害が次第に多くなる傾向  
が見られますので、この虫について北海道  
で調査された事項を中心として記し、防除



幼 虫 (拡大)

上の参考にご供したいと思ひます。  
經過習性  
札幌地方では年に二回成虫が発生しま  
す。冬季は土中三種内外の深さに繭内に老  
熟幼虫で越冬し、翌春蛹化、六月中旬から  
下旬頃に羽化し外界に現われます。この成  
虫は体の大きさが四耗くらい、透明な四枚  
の翅を持つた黒色の葉蜂で、晴天、無風、  
温暖の日に活潑に活動しながら、日当りの  
よい場所のよく開いた櫻桃や梨の葉の組織  
の内に一粒ずつ産卵します。成虫の寿命は  
大体十日位で、卵は十二、三日で孵化しま  
す。孵化当時の幼虫は体長一・四耗くらい、  
全体が少し緑色を帯びた淡黄色でほとん  
ど透明ですが、成長するに従つて次第に  
褐色を帯びた黄緑色となり、時にはほと  
んど黒色にまで変色します。皮膚はゼラ  
チン様の一種の臭気のある粘質物で覆わ  
れ、胸の部分が著しく膨れてへら状を呈  
し、一見ナメクジのような形をしていま  
す。孵化した幼虫は生まれた附近から葉  
の裏面を残して上面の葉肉のみを網目状  
に食つて成長し、二十五日くらいの間に  
五〜六回脱皮した後、枝幹を伝わつたり、  
または落下したりして地上に降り、適当

な潜入個所を見つけて地中に入り、繭を作  
つて蛹化します。繭は楕円形、濃暗褐色で  
長さが七耗くらい。被害葉ははなはだし  
いものは赤焼したようになり、落葉しますが、  
この第一回目の幼虫の加害時期(六月下旬  
〜七月中旬)には樹の成長機能が盛んな  
ので、落葉してもそのために枯死するよう  
なことはめつたにありません。  
この蛹から羽化して、第二回の成虫が七  
月下旬から八月上旬にわたつて現われ、前  
と同様にして産卵し、孵化した幼虫は八  
月中旬〜九月下旬に再び加害します。この頃  
には櫻桃、梅等は成長機能が停止する頃な  
ので、その被害による影響が大きく、とく  
に樹勢の衰えた樹は往々被害を回復するこ  
とができずに枯死する場合があります。老  
熟した幼虫は地中に入つて繭を作り、幼虫  
のまま越冬します。第二回目の成虫の寿  
命、卵期間は第一回目のそれより短いが、



櫻 桃 被 害 葉

幼虫の期間は長くなつてい  
ます。この虫の食餌植物として、福島県では櫻  
桃、桜、梨、マルメロ、桃等が知られてい  
ますが、札幌地方では、櫻桃に被害がはな  
はだしく、桜、梨がこれについています。  
昭和十三、四年頃の発生により、櫻桃の枯  
死したものも少なくなく、最近においても、  
桜の並木などが時ならぬ冬木立の状況を呈  
するものしばしば見受けられます。

### 防 除 法

一 幼虫の発生期(六月下旬〜七月中旬、  
八月中旬〜九月下旬)にデリス石鹼液(水  
一斗、デリス粉五匁、石鹼十五匁)を撒布  
すれば極めて効果があります。なお、これ  
より多少効果が劣りますが、除虫菊石鹼液  
(水一斗、除虫菊粉十五匁、石鹼十五匁)の  
撒布も有効です。

二 BHC 〇・五% 粉剤、BHC 乳劑  
〇・二% 液(原液二〇% 乳劑の場合は一、  
〇〇倍にうすめる)、BHC 水和劑 〇・  
二% 液(五% 水和劑は水一斗に対し二十匁  
をとかす)のいづれかを撒布しても卓効が  
あります。

三 毒剤を使用する場合は、砒酸石灰は  
効果が劣りますから、砒鉛酸を使用する方  
が有利です。ただし砒素剤は往々薬害を起  
すことがありますから注意を要します。

四 薬剤撒布の場合は、発生地帯の各戸  
が一齊に行ふことが望ましく、櫻桃や梨に  
近接した桜などに発生している場合は、こ  
れらについても防除を怠らないようにしな  
ければなりません。

附記 以上、北海道におけるこの虫の經  
過習性及び防除剤の一部については、北海  
道農業試験場において行つた杉原勇三氏の  
研究に負うところが多いためここに附記す  
る。(筆者は北海道農業試験場技官)